

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-8

辰巳は沈黙し、真紀の婀娜っぽい口元を無遠慮に見つめて、次の言葉を待っていた。

「『W酒蔵』のある千曲市には【あんずの里】と呼ばれている観光名所があって、開花時期の3月下旬から4月上旬には10万人もの花見客が訪れるそうです。あんずの実の生産量は全国トップクラスで、その話は今年の7月に収穫された果実を麻里子さんが送ってくれたことで初めて知ったわけです。これから本題に入りますが、あんずの実と一緒に送られてきた4合瓶の中身についての説明書きが気になっていたのです。内容を要約しますと、あんずの種子の中にある杏仁と氷砂糖を米焼酎に1年ほど漬けただけの混成酒だそうです。琥珀色の中身を試飲してみると、甘くほろ苦いアーモンドのような風味が良くて独特の美味しさがあったので、商品化したら面白いのではないかと……、7月の終わりの出来事を、今しがた舌の記憶が蘇って思い起こさせてくれた次第です」と真紀はいかにもありそうなことのように言った。

「ひょつとして、それはイタリア産のリキュールでアマレットに似た酒かもしれない」

辰巳は興味深げに、用紙にボールペンを走らせた。

「米焼酎は自家製だろうね？」

「ええ、亡くなられたオーナーが心血を注いで商品開発したと聞いています」

「あんずの里と米焼酎の組み合わせかー、それは面白い。今貴女が口にしたことが、会社再生の切り札になるかもしれないよ」

「もしそうなったら……、とてもありがたいことです。だって追い詰められて、絞り出した一滴のお酒の涙ですもの」と真紀は目の奥に朧気な光を浮かべて言った。

「ワインの涙は聞いたことはあるが、上手いことを言うねー。話は戻るが、アマレットはご存知かな？」と辰巳は尋ねた。

「知っています。言われてみて、あっ、あれねって、味覚の糸が繋げてくれました」

「今飲んでいたコニャックにアマレットを混ぜるとフレンチコネクションというカクテルになるんだ。実に不思議な連鎖だと思わないかね」と辰巳は同名の映画の中で刑事役を演じた男優ジーン・ハックマンの尋問口調を我にもなく真似ていた。

「そうですか。何でもご存じなのですね」と真紀は辰巳のちらつく浮かれた表情に本気度を探りながら皮肉まじりに言った。

「長野へは、私が行きたくなかったよ」と辰巳は真紀の疑念を晴らすでもするかのよう、いきなり真顔で明言した。